

「ピッピ。」
二点せんしゆしたところで、ホイッスル。
前はんしゆうりよう。

「ハアー、ハアー、ハアー。」

息の音がはげしい。

「ピッピ。」

後はん開しだ。

ボールは相手の手元。

「タッタッタ。」

必死にかけこむ。

「バン、パシリ。」

続けて、シュートが入って逆点。

くやしかった。

ぼく達は敗けた。

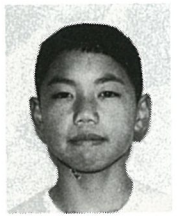
シリーズ ②

我が家の家庭教育

小川台 鈴木 広子

我が家は、主人、おばあちゃん、私(母)、長男、二男の五大家族です。長男(小学一年生)、二男(四歳)、まだ家庭教育といっても日が浅すぎて、何をどういつたら良いかわかりませんが、今までの出来事を取り上げたいと思います。

甘えん坊の長男が、二歳半の頃のことです。二男が生まれ、これでやっとお兄ちゃんらしくなるかと思つたら、その反対で、生まれて間もない頃は良かったのですが、二男があやすと笑い、ヨチヨチ歩くようになってくると、皆が二男の方へ目を向けるようになってきたのです。



6年 関口 政輝

雑草

ほんの少しの望みでもあきらめはしない。そんなにしてまでして、生きなければならぬのか。

コンクリートのわずかなすきまから、はいだしてどうする。すぐにかり取られてしまふだろう。

すると、長男は面白くなく、へそを曲げるようになってきました。これが保育園に入る頃まで続き、こうなってくると親としてどう対処してよいか迷ってしまったのです。反発されると、昔の封建的教育のように「こうしなさい」と言つて押えつたりもしました。でも、そうするとかえって逆効果となつてしまい、これではいけないと思ひ、よく話を聞いて、それから、どう我が子に言つたら良いか考へて言うようにしました。でも、いつもそのようにはいかず、カーツとしてしまふことも何度かありました。

子供は、敏感だと思ひます。周りがおだやかな気持ちでいると素直であり、イライラしておこりっぽいと子供も反発的になる。なるべく、いつも落ち着いて、物事に対処していきたいと思ひます。今年の十一月の暖かい日曜日のことでした。子供達二人を連れて私は、畑へ落

「雑草よ。」

ふまれても、ふまれても、強く伸びようとす。

取られても、取られても、芽を出し続けようとす。

暑く干上がった大地に。

カラカラとしたグラウンドに

ぼくは、走りながら感じる。

どんなにつらくても、生きぬこうとする、

「雑草」

ほんの少しの希望でもあきらめはしない。

生きる力が伸びる、その強い生命力を。

花生の取り入れに行つたのです。初め、子供達は穴を掘つたりして土遊びをしていたので、私が一人で掘つて逆さにしてある落花生を束ねて運んでいると、何も言わないのに、長男が「ぼくも手伝う」と言つて、両手がやっつと回る位に束ねた落花生をかかえて、子供には無理な四メートル位ある土手の上の道路に止め

である軽トラックに積み始めたのです。すると間もなくして、二男も「ぼくも」と言つて、手伝い始めました。二男にはちよつと骨がおれるようで、半分ころがしながら、土手の下まで持つて行き、一人で土手の上まで行こうとしたのですが、束ねた落花生が重くて、登れないで後ずさりしてしまいました。すると、それを見ていた長男が土手の下まで受け取りに行つて軽トラックに積みだしたのです。そして、ほとんど積んでしまいました。まだ、小さなこの子供達、よく頑張りま

伊藤 鏡子
行き先を書きて置きたる幼孫の
文字たどたどし繰り返へし読む

土屋 好
寒き夜に繩ない励みし若き日を
想ひ眠れず匂ふ新居に

した。あとで「今日は、おりこうだったね。」とほめてあげました。

すると、二人ともニコニコと誇らしげな顔をしていました。私は、こんな子供達との小さなふれあいが家庭教育につながると思ひます。まだ、教育まで行かない保育の延長のようですが、日常のあいさつや思いやり、何事にも努力することの大切さなど、言葉ではなく行動を通して教えていきたいと思ひます。

